

研究報告

フロリダとフロンティア学説についての一考察

藤井勝俊

今日国際問題は重要であり、過去の狭いナショナリズムは非難される強い傾向がある。

しかし、合衆国が現在世界の舞台で演じている役割、採用している政策、人類に寄与している貢献は、少なからず合衆国の過去を理解し、また解放することによって決定されるのである。この意味で、ターナーセオリー、なかんずくフロンティア学説^①を討究することは、今尚重視されるべき課題といえるであろう。

初期アメリカ史家は、主に東部大西洋岸からの見解に立っていた。すなわち、アメリカ史におけるヨーロッパの影響や、植民地時代の伝統などを強調した^②。

これに対してターナーは(Fredrick S. Turner)新見解、大陸に拡大し、そのフロンティアが三百年後に消滅した新しいアメリカを理解することに対する、より有意義なアプローチを

求めたのであつた。彼は、一八九三年シカゴのアメリカ史学協会大会において「アメリカ史におけるフロンティアの意義」と題して講演し、また、一九〇三年「アメリカ民主主義に対する西部の貢献」という論文を発表した。この二論文によって、いわゆる「フロンティア学説が確立されたのである。

ターナーの思想は、アメリカ史家の想像力をとくえ、約一世代の間、フロンティアの研究と西部開拓に関してアメリカの発展を解釈することに史家をおいやくた。

しかし、一九三〇年代に入ると、この学説をめぐる批判と論争が活発化し、結論を得ずに今日に至つた^③。一九六五年の段階において、ターナー自らもこの仮説をそのまま受け入れることはできない。しかし、彼の仮説の意義を過少評価することも危険である。

私は、外人かの論者が彼らなりにこの仮説を評価している中、また最近、従来の北部中心のアメリカ史研究に対して南部

かゝりてアメリカ実研究を進捗している状態に照らし、主としてフロリダ大学のトムソン教授 (Arthur Thompson) のフロリダへのアプローチに基きなぶり以下、いささが整理したいと思ふ次第である。

ところで念のため、いわゆるフロンティア学説なるものを私なりに要約すれば、次のようになる。

一六〇七年最初の定住移民が行われてから、アメリカ植民地は約三百万の人口をもつ十三州として独立を達成するのに百七十年余を要したのであるが、その後、僅か半世紀の間にアパラチア山脈以西の人口が六百万に達した。

このことは、西部の発展が十九世紀に入つて以後いかに進歩したかを示している。

十九世紀前半におけるアメリカ人の関心はほとんど余す所なく西部の発展に向けられ、彼等各自の好む所に従つて、西方に向かつて発展していつた。彼等を魅惑したのは新しい土地であつた。未開の土地が豊富に存在し、未開の土地こそは、自由と富を彼等に予見させたし、富を生産する最も簡易な手段であつた。そこにはインディアンがいたけれども、彼等には近代的地所有の觀念もなく、白人もまた、その曖昧な土地所有権を尊重しなかつた。したがつて、西部、すなわち自由土地 (Free Land) は機會の別名であつた。西部 (West) とは、ある地域を指すのではなく、社会のある形態、社会組織のある段階を意味するが、それがより低い、より粗い形態であり、より低い段階であることはいふまでもない。したがつて、植民当初の大

西洋沿岸一帯はイギリス (ロンドン) の西部であり、最も古い西部 (Oldest West) であつたといふことができる。西部の西端には人口の波の外縁、野蛮と文明の接触点が存在するに相違ない。われわれはそこを「近境」 (Frontier) と呼びたい。^④

時の経過に於てフロンティアは西へ移つていつた。それとともに近境を南北に連ねる線、いわゆる「フロンティアライン」 (Frontier Line 近境線) が西へ移るの姿みられるわけであるが、そういう並行的、全般的な西進をわれわれは「西漸運動」 (Westward Movement) と呼ぶ。

近境線は十七世紀の末にはフォールライン^⑦の少し西方にあつたが、独立戦争の頃には一部分アリゲニ山脈を越え、ケンタッキーとテネシーとに侵入していつた。つまり、フォールラインは、十七世紀のフロンティアを、アリゲニ山脈は十八世紀のそれを示しているわけである。^⑧

一八八〇年のセンサスの結果、「もはやフロンティアラインを地図の上に示すことはできなくなつた」といふ国勢調査局の発表が行われた。このことは、フロンティアといふ歴史的な大きな動きの終幕を意味した。^⑨

自由土地を持つ地塊の存在、そのたえまない後退、アメリカ人の西部移住の進展、これらはアメリカの発展を説明するものである。^⑩

アメリカ社会の発展は、たえまなくフロンティアにおいて繰返し開始して来た。^⑪

この国の歴史の真の見解は、大西洋測ではなく、それは大西洋部である。^⑫

アメリカのフロンティアは、ヨーロッパのそれと明かかに異なり、フロンティアラインは稠密な人口の場所を通つてゐる。もつともアメリカのフロンティアについて代表的な事柄は、自由土地のあちこちに横たわつてゐたことである。¹⁷

アメリカの開拓に於いて、われわれは、いかにヨーロッパの生活が大陸に入つて来たか、またいかにアメリカで裝飾されかつ発展し、いかにヨーロッパに反応してきたかを観なければならぬ。われわれの初期の歴史はアメリカの環境において発展したヨーロッパの萌芽の研究である。¹⁸

フロンティアは、最も急速かつ、効果的なアメリカ化の線である。未開の地は植民地を征服する……略それは、鉄道の客車かつ彼を下ろし、樺の皮をつくつた丸木船に乗せる。文明の衣さはぎとり、狩猟用のシマツと鹿皮の靴を着けさせる。¹⁹

じよじよに彼は未開地を征服するが、それはヨーロッパでもなく、ドイツ人の萌芽でもない……中略……争突は、ここがアメリカの新しい所産であるといふことである。最初フロンティアは大西洋側であつた。それは本當の意味であつた価値は、フロンティアをよりアメリカ的のものにした。²⁰

このように、フロンティアの進展はヨーロッパの影響からはなれていく着実な動きであり、アメリカの線にそつて独立する着実な生長を意味して来たのである。²¹

地方の分離は、とくにアメリカの傾向として増加した。それと関連して、運輸（東部との）の便宜の必然性、内部改良の重要な計画を生みだした。……略……こゝに自意識の差しセクシヨンとして西部が展開し始めた。²²

大西洋側のフロンティアにおいて、われわれは、継続したフロンティアの繰返しのプロセスの中に萌芽を学ぶこととできる。われわれは、複雑なヨーロッパの生活が未開の地においてするどく初期の状態の單純さに失墜することを知つてゐる。²³

各々のフロンティアは、アメリカ化に同じよりに貢献してゐる。フロンティアは、アメリカ化に同じよりに貢献してゐる。すべての類似点について、場所的要素により、時間的要素により顕著な相違点がある。²⁴

これらいろいろなフロンティアに注目することは、歴史學の向題として、価値あることである。²⁵

山脈の開拓先駆者と海岸地帯の間に横たわつてゐるときから、アメリカニズムといふ新しい秩序が起つた。²⁶

アメリカの人々の混合した国民性の形成をフロンティアが促進したこと注目しよう……略……海岸線は圧倒的にイギリス的であつた。²⁷

きびしいフロンティアの試練の中で移住民たちはアメリカ化され、自由化され、そして混合民族として融合する。そしてそれはイギリス人の国民性でなかつた。²⁸

フロンティアの伸張は、イギリスへの依存性を減少させた。とくに南部海岸線においては、いろいろな産業ができた。それらの供給はイギリスに依存してゐた。²⁹

連邦政府の諸権力を最も多く発展せしめ、また政府の活動に最大の役割りを果たした立法は、フロンティアによつて条件づけられたものである。³⁰

ナシヨナリズムの成長と、アメリカの政治制度の進化は、フ

ロンディアに依存していた。(27)
……憲法の拡大解釈は、国家が西方へ進んだために増大した。(28)

土地、関税、内地改良事業に關する立法は——それは全国化したホイッグ党のアメリカの制度と叫ばれるものであるが——フロンティアの理論と必要性によつて条件づけられたものである。しかしそれは、フロンティアが海岸線のセクシヨナリズムと対立してはたらく立法的活動の中においてではなかつた。フロンティアの経済的、社会的性格はセクシヨナリズム

(Sectionalism)と相對立している。(29)

ジェフアンン (Jefferson) の民主主義を、モンロー (Monroe) の国家共和主義、およびアンドリュージュヤクソン (Andrew Jackson) の民主主義に転化せしめたものは、西部の連邦統一の傾向であつた。(30)

フロンティアの最も重要な影響は、アメリカおよびヨーロッパにおける民主主義の助長にありてあつた。それがサジェストされたときから、フロンティアは個人主義の所産である。(31)
フロンティアの個人主義は、促進された民主主義の始まりであつた。(32)

自由な土地が存するかぎり、相当な資格を有するために機會 (Opportunity) は存在する。また経済力は政治的権力を確保する。(33)

フロンティアの着実な進歩は、個人主義、民主主義、そしてナシヨナリズムをもたつた。そしてそれは東部に、旧世界に、よく影響した。(34)

フロンティアは去つた。そしてその消滅とともに、アメリカの第一期終つた。(35)

われわれの政治制度、われわれの民主主義の歴史は模倣の歴史でもなければ、また単なる信りものの歴史でもない。それは變化する環境に適応して機構の発展および適合の歴史であり新しい政治的種子の起源の歴史である。それ故に、この意味において西部はわれわれの生活において最高の意義を持つ建設的な力であつたのである。(36)

すべての中で最も重要なことは、自由な土地の地域が、合衆国の開拓された地域の西方の境にたえず横たつていたといふ傾向である。東部において社会的諸条件が固定化しようとする傾向があるとき、資本家及び労働者を圧迫しようとしたり、あるいは政治的束縛が大量の自由を妨害しようとしたときは、いくつもフロンティアの自由なる条件へ逃避する門があつた。これ等の自由な土地は、個人主義、経済的平等、台頭する自由、民主主義を促進した。この希望にもえた自由と平等の土地がかれらの所有のために存在したときには、人々は劣悪な賃金や社会的下積みの恒久的地位を受け入れたいとは思わなかつた。(37)

アメリカの民主主義は決して理論家の夢から生れたものではない。それは、また、スーザン、コンスタント号でヴァージニアにもたらされたものでもなければ、メイフラワー号でブリマースにもたらされたものでもない。それは、(フロンティア) はアメリカの森の中から生まれたものである。そして、それは新しいフロンティアに接する度毎に、新しい力を得たのである。(38)

このように、ターナー学説は、民主主義がアメリカの森の中

で生れたものであると主張し、また、フロンティアがアメリカニズムなものはそのナショナルリズムを助長し、いわゆる民族のルーツたる役割りを果たしたとした。そのクエスターナーは、セフシヨンの重要性を始めて取りあげている。さうに彼は、西部の自由な土地が経済的社会的な安全弁の役割りを果たしたことを指摘している。

ハーバート大学校長スミス教授 (S. M. Smith) やライト教授は、(B. F. Wright) フロンティアが民主化に影響を与えたという考え方を攻撃し、他の人々は、都市化、産業革命、基本的階級矛盾の台頭とそれらの重要性の意義を見ぞこなつたと非難している。なかんずく、マルクシストであつたコロムビア大学のハッカ―教授 (L. M. Hacker) は、唯物史観の立場から、フロンティアが経済的、社会的な安全弁であつたという論議に反対している。彼は、西部の土地が重要であるのは、ヨーロッパからはなれて独自のものを作り上げたからではなく、アメリカ合衆国が債務国であつたときヨーロッパの支払いに於ける農産物を生産するために大きな役割りを果たしたからである。このことがアメリカ資本主義の形成に極めて重要であることとクエスターナーは見落しているといつてゐる。またイリノイ大学のシヤノン教授

(A. F. Shannon) は、西部、自由土地は決して安全弁ではなかつたと非難している。一方、コロムビア大学のヘイス教授 (C. J. Hayes) のこときは、合衆国の知的隔離 (ヨーロッパ文明からなれてゐること) は少くともフロンティア仮説の影響のせいであると考究してゐる。だが、シカゴ大学のクレブソ教授 (A. D. Krauss) やテキサス大学のウェブ教授 (W. P. Webb)

などは、フロンティア概念をさうに推進せんと努力した。では一体、フロンティア仮説、とくに民主化へのその影響はどうかんがえればよいのであろうか。(39)

南部アメリカのフロンティアを加速したのは綿であつた。一七九三年にコトンジン⁽⁴⁰⁾が發明されて以来、高地綿の栽培は収支を償ふものになつてゐた。一方において、イギリス産業革命の発展に歩調を合せて綿花需要は拡大した。そして綿のフロンティアシヨンは急速に東地に向かつて拡大しはじめ、それとともに死寂に類してゐた家天長的ニグロ奴隷制は營利的奴隷制へと甦生した。とくに勞働力としての奴隷の価格は時とともに騰貴してレクたが、土地は東地では安価であつた。

低地のプランターが、奴隷をひきつれてアランドサウス (Upland South) に向つてきたとき、その地にいた自由な小農民は、小麦や玉蜀黍の栽培をやめて、畑を拡張し、奴隷を買ひ入れて彼自身プランターに転身するか、あるいは、独立自営をするために財産を売り払つて辺境に入つてゆくかの立場にせまわれるのであるが、彼等は転身出来るような余裕は全然なかつたといつてもよい。それ故、必然的に後者を送んだ。

プランターの着るしい西漸は、西部にもプランテーションにもたらされ、発展してゆく。それは「北西部」(North West) に対する「南西部」(South West) というセクションを生むことになる。(41)

以下、焦点をフロリダにしばつてみてゆくことにする。一八一八年、モンロー大統領は、ジャクソンに命じて、イン

ディアン討伐をさせた。このときジャクソンは、インディアンを追つてフロリダを占領してしまつた。当時フロリダは、スペインの植民地であつたが、合衆国政府はその地を熱望してゐた。ために同政府は、この既成事実を利用して、一八一九年、五百万ドルをスペインからフロリダを買収した。

ジャクソンに従つて、メアリランド、ヴァージニア、北カロライナのプランターの次子男がプランターになるためにフロリダにやつてきた。これを Jackson follower と呼ぶ。

彼らは、勞働力不足をおぎなうために「フロリダ銀行」を設立し、銀行債を売り、集めた資金で奴隷を購入して割りあてた。彼らは、おおむね一八三五年ごろまでに未住したわけであるが、いわゆるヨーマン (Jacksonian man) といえるものではなく、旧軍人が多かつた。一八三五年以降になると、メアリランド、ヴァージニア、北カロライナからヨーマンがやつて来た。彼らは最初の三、四年間、冷害、インディア防衛、フロリダ銀行の倒産などのために苦勞した。しかし彼らは、僅かの間に、政治組織をつくり、Jackson follower を追放した。すなわち、フロリダにおいてはヨーマン層が Jacksonian Democrat として勢力をもつたのである。

彼らヨーマン層は次のような問題をもつていた。フロリダ銀行はプランター以外の利益にならないとしてこれに反対した。また、たえずインディアンへの防衛問題になやまされた。さうに彼らは、入頭税が不当であるとして反対し、かつ担保の流れを延ばす法律の制定を要請した。⁽⁴²⁾そしてこのジャクニアンデモフラントは、フロリダでかなりの成功をかちとるのである。

では何故、フロリダにおいてヨーマンが成功したのか。このことは、民主党がフロリダで送挙戦で勝つたことによつて示される。それは前に述べたように、中産層が政治組織を確立したこと、送挙戦で勝つことができたのは、従来と異なり候補者次直接人民にアピールしたことに帰せられるであろう。このほかスローガンが適切であつたこと、パレードを行つたり、党派的新聞のPRがよかつたこともあげられる。さうに重要な点は、スポイルシステム (Spoils system) によつて、自党が勝つと役職を兼任でき、副収入をあげられることをみおとしではなるまい。これはジャクソンを支持させた重要な点である。そのうえ、Aimed occupation act によつて、インディア防衛のために、一六。エーカーの土地を無料に交付されたこともジャクソン支持の一因である。このようにフロリダでは、ヨーマンが未住し民主的傾向が確立されたといふことができるであらう。⁽⁴⁴⁾

しかしながら、南北戦争以後になると、今までの民主党支持のヨーマン層はフロリダの地を去り、カリフォルニアへ行くか、独立民主党をつくるなければならなくなつた。⁽⁴⁵⁾この場合彼らは、入権を主張するより州権を主張するようになっていた。かつてのジャクニアンデモフラントは富裕者となり、またヨーマン層自体も、勞力不足の故に奴隷制度支持にかたむいていくた。

以上の事情が明白なようにフロリダにおいては、フロントニアが民主主義を育成したと断言できなげであらう。

フロリダは、最初のうちは民主的体相をもつていたが、時のたつにつれて、次第に非民主的な様相を増すようになるのであつた。ヨーロッパ人はプランターズやクマースと、その地をばなれて、北西部へ西部へ逃亡していき、残るは、奴隷所有者やそれに賛成する人たちであつたといえよう。以上のように、フロリダのフロンティアはヨーロッパ人デモクラシーの育成の地としてでなく、一時的避難所としてしか作用しなかつたのではなからうか。⁽⁴⁶⁾ また、民主主義や白人主義をむしろ破壊する方向に走つたのではなからうか、と結論づけざるをえない。

これは、フロリダでは州権の色彩が強く、労力としてニプロ奴隷を用いたという点に由るところがあるであらう。

しかし、それはともあれ、フロンティア学説がフロリダにおいて適合しなたい事実を無視することはできない。

もとより、先に述べたように、フロンティア仮説を修正するならば、アメリカ史理解に当つて無視することは誤りである。しかし、その根幹を既す、森の中の民主主義ないしは民族クルツ木論をそのまゝ、うけいれる。とくにフロリダにおいて適用することできない点も、指摘されなければならぬ。

私は、アメリカとは何ぞやを把握するに際して、ターナーセオリーとその批判の長所をうけいれつゝ、さうに研究をつづけたいと思ふのであるが、本稿はたゞフロンティア仮説の一向幾点指摘するのみである。

- ① George Rogers Taylor ed, *Problems in American Civilization* (1956)
- ② "The Turner Thesis concerning the Role of the Frontier in American History," p. 4
- ③ 例えは H. P. Adams の暗れた淵源説で、いろいろなアメリカの持つべき政治社会制度は、その環境に関連なく、初期のものから発達するもので、したがつてアメリカの持つべきの制度は、すべてヨーロッパのそれの発展であるとする説である。
- ④ "The Significance of the Frontier in American History" (1893)
- ⑤ "Contribution of the West to American History" (1903)
- ⑥ 中屋健一「米國史研究入門」(1953) P. 20~21
- ⑦ Turner "The Frontier in American History," 1963, P. 3, 4, 12, 205, 206.
- ⑧ 大西洋に注ぐ諸河川の通航終点、又は早瀬の点を南北に連ねる線
- ⑨ Turner *Ibid.*, op. cit., pp. 9, 12, 5.
- ⑩ " " " " p. 1.
- ⑪ " " " " p. 1.
- ⑫ " " " " p. 3.
- ⑬ " " " " p. 3.

①④ Turner *Ibid.*, P. 3
 ①⑤ " " " P. 3-4
 ①⑥ " " " P. 4
 ①⑦ " " " P. 4
 ①⑧ " " " P. 7
 ①⑨ " " " P. 9
 ②⑦ " " " P. 10
 ②⑧ " " " P. 10
 ②⑨ " " " P. 18
 ②⑩ " " " P. 22
 ②⑪ " " " P. 23
 ②⑫ " " " P. 23
 ②⑬ " " " P. 23
 ②⑭ " " " P. 23
 ②⑮ " " " P. 23
 ②⑯ " " " P. 24
 ②⑰ " " " P. 24
 ②⑱ " " " P. 24
 ③⑰ " " " P. 24
 ③⑱ " " " P. 25
 ③⑲ " " " P. 27
 ③⑳ " " " P. 29
 ③㉑ " " " P. 30
 ③㉒ " " " P. 30
 ③㉓ " " " P. 30
 ③㉔ " " " P. 32
 ③㉕ " " " P. 32
 ③㉖ " " " P. 35
 ③㉗ " " " P. 38
 ③⑸ *Ibid.*, Ch. III, "The Problem of the West,"
 Pp. 205-6
 ③⑹ *Ibid.*, Ch. IX "Contribution of the West"

to American democracy" P.259

③⑸ *Ibid.*, Ch. VI, "The West and American
 Ideas," P.293

③⑹ George Rogers Taylor *ed.*, *Problems in
 American Civilization* (1956)

"The Turner Thesis concerning the Role
 of the Frontier in American History,"
 Pp. VI-VII;
 中屋健一「米國史研究入門」P. 33~48

④⑦ 日高明三「シヤンニアン・デモンラン」(1948) P. P. 48 終
 の種子と除去する機械

④⑧ 日高明三 *Ibid.*, P. 59

④⑨ トムソン一九六〇年京大アメリカ研究セミナーオセロ日から

④⑩ 独官制又は、党人任用制と誤し、選挙で勝利を得た政党が
 官職を独占するといふ連邦政府の新しい制度であつた。従来
 ほとんど無風状態にあつた政府官吏は大統領の選挙に伴つた
 大変動をよまなくされた。

これは、世襲的な官職保持を防ぎ長期在任によつて生じが
 ちな専制的あるいは貴族的傾向を阻止する民主的な制度であ
 つたが、一面には独官運動が行われ官吏の経験がつかすこと
 の出来ない弊があつた。誰でも官吏になれる制度の途を拓い
 たのである。「官職交代制」(Rotation in office)によ
 りもこの時代の所産である。

④⑪ トムソン・京大アメリカ研究セミナー オセロ日から

④⑫ トムソン "オセロ日から"